

星 祐子* 雷坂 浩之** 高見 節子**

はじめに

視覚に障害のある子どもたちの早期支援については、近年、全国の各盲学校をはじめとした早期支援機関において、その支援が行われてきている。その中で、関連諸機関との連携および支援システム構築については、常に課題として提起されてきているものの、全国的な調査がなされないままになっていた。そこで、全国の盲学校および地域の視覚障害乳幼児相談関係施設を対象とした調査を実施し、具体的な課題を明らかにすることで、乳幼児支援体制、フォローアップシステム構築に向けての一資料とした。

1. 調査概要

(1) 目的

全国の盲学校および視覚障害乳幼児相談関係施設における視覚に障害のある乳幼児支援の実態を把握し、課題を明らかにする。

(2) 対象

平成18年度現在、幼稚部が設置されている全国の盲学校および地域の視覚障害乳幼児相談関係施設の乳幼児教育相談担当者

(3) 方法

アンケート調査を実施する。

(4) 時期

平成19年1月配布（郵送）

平成19年2月回収（郵送）

(5) 主な調査内容

アンケート用紙は末尾に示した。主な調査内容は以下の通りである。

- ①所属及び在籍・相談・支援乳幼児数
- ②来校・来所年齢
- ③紹介ルート・紹介時の問題点
- ④視覚障害の判定システム
- ⑤早期支援機関
- ⑥他機関との連携

- ⑦教育相談担当職員数
- ⑧保護者への情報提供内容
- ⑨保護者からの質問・相談項目
- ⑩視覚障害乳幼児の発見・診断・支援システムについての意見

2. 結果

(1) 回収数

回収率 90.1%、回答数：63校・10施設

(2) 盲学校および施設における乳幼児数

アンケート実施時期における乳幼児数は表1の通りである。0～2歳児の在籍児については、盲学校幼稚部在籍対象年齢未満であるため、視覚障害関係施設の在籍がほとんどであるが、相談・支援児を加えた合計は780名で全体の32.3%を占めている。また、学年があがるにつれて人数が増え、重複児数については、合計812名と乳幼児総数2412名の33.7%にのぼっている。

表1 盲学校等における乳幼児数

	在籍児数	相談・支援児数	合計
0歳児	2	124	126
1歳児	26	220	246
2歳児	35	373	408
3歳児	116	386	502
4歳児	120	436	556
5歳児	115	459	574
計	414	1998	2412

(3) 盲学校等への初回来校・来所の平均的な月齢

図1に、盲学校・視覚障害関係施設への初回来校・来所時の平均月齢の分布を示した。早ければ5か月未満、遅い場合は3歳を過ぎてからの来校・来所とかなりのばらつきがみられた。

* 筑波大学特別支援教育研究センター ** 筑波大学附属視覚特別支援学校

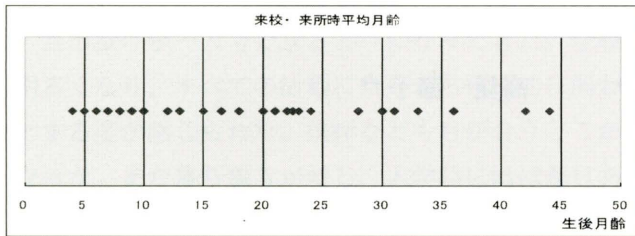


図1 盲学校等への初回来校・来所時の月例の分布

(4) 盲学校等への主な紹介ルート

盲学校等への紹介ルートについては、表2に示したとおりである。眼科病院・総合病院眼科、保健所・保健師、保育園・幼稚園・療育機関等と共に、学校ホームページ、クチコミなど、その他を選択した人もかなりの数にのぼった。

表2 盲学校等への主な紹介ルート

紹介ルート		回答数
眼科病院・総合病院眼科		68
保健所・保健師		63
視能訓練士		22
産院産科医小児科医		14
保育園・幼稚園・療育機関等（上記ルート以外）		48
その他		48
内訳	学校HP	37
	クチコミ	32
	パンフレット	4
	広報誌	4
	眼鏡店	1

(5) 紹介過程での問題点

医療機関での対応について、診断機関での対応について、保健所・行政機関等での対応について、それぞれの問題点、自由記述により表3、表4、表5のような回答（複数回答）を得た。

表3 医療機関での対応についての問題点

回答内容	回答数
病院が相談・療育・教育機関を把握していない	23
保護者への説明不足・不安や疑問点に対するフォロー不足	5
視覚の状態の把握が難しい	4
その他（現状についての記述のみ）	3

総回答数 32

表4 診断機関での対応についての問題点

回答内容	回答数
相談・療育・教育機関の紹介がない	18
保護者への説明不足・不安や疑問点に対するフォロー不足	11
診断・視覚の状態の把握が難しい	3
診断後の連携が図られている	2
その他 ・現状についての記述 ・地域差	5

総回答数 36

表5 保健所・行政機関での対応について

回答内容	回答数
保健所や行政機関等からの紹介や連携が図られていない	12
支援機関についての情報がない	8
同機関でも担当者によっての対応の違い	5
盲学校を紹介する事への抵抗感があるようだ	2
その他（現状についての記述）	2

総回答数 26

(6) 視覚障害の判定システム

判定システムの内容としては、回答のあった全ての機関が各自自治体の3歳児検診等の定期検診をあげ、独自の判定システムを有していると回答した機関はみられなかった。3歳児検診（自治体によっては、3歳6か月検診）においては、保健師および家庭における絵指標やランドルト環を用いての視力の評価がほとんどであり、眼科医等の関わりについては、視覚に何らかの問題があると疑われた場合に受診をすすめるといった流れであった。

(7) 保護者からの質問・相談項目

保護者からの質問・相談項目は、表6の通りである（複数回答）。子どもの年齢に関係なく、全体的に多い項目は、睡眠・食事、玩具遊び、親子関係などの項目であった。全盲児の場合は、生活リズムの確立を課題としている場合が多くみられるため、睡眠・食事（睡眠との密接な関係がある）の問題は年齢を重ねても選択数が多かったのではないかとと思われる。子どもの年齢が上がるにつれて増加した項目は、コミュニケーション、ことば、認知、視力検査、視覚活用、触覚聴覚活用、手指の活用、運動、歩行、就学進路、遊具遊び、補助具関係、友達関係、躰といった項目であり、乳児期にあげた項目の内容において質的な変化はあるものの、そのまま課題としてあげられるようだ。たとえば、「食事」については、年齢を重

表6 保護者からの主な質問事項

質問事項	0歳児	1歳児	2歳児	質問事項	0歳児	1歳児	2歳児
補助具選択	1	1	7	遊具遊び	15	29	35
補助具申請	1	1	4	玩具遊び	34	44	37
補助具全般	2	2	7	視覚活用	23	31	35
視力検査	13	20	30	障害者手帳	5	8	8
視野検査	2	3	3	教育療育機関	15	16	20
色覚検査	0	0	0	他障害	10	10	12
知能検査	0	2	6	就学進路	8	10	27
コミュニケーション	24	29	42	親の会	5	3	2
運動	23	31	35	親子関係	22	16	22
歩行	14	38	37	兄弟姉妹	6	11	15
手指の活用	16	29	35	家族	6	4	5
認知	9	17	27	友達関係	2	5	14
ことば	21	35	41	睡眠・食事	43	50	41
触覚聴覚活用	15	21	22	躰	4	8	13

表7 保護者への主な情報提供内容

視覚障害	51	運動	44	障害者手帳	28
障害理解	48	歩行	29	補装具申請	15
障害受容	33	手指活用	47	進路	8
補助具	37	認知	35	就職	1
盲学校	40	ことば	35	就学	33
弱視学級	18	触覚聴覚活用	52	視覚活用	47
通級指導教室	9	遊び	58	親子関係	34
視力検査	37	発達全般	47	生活習慣	39
視野検査	13	家族	29	躰	11
色覚検査	2	保健師	10	親の会	12
知能検査	5	視能訓練士	8	視覚障害者団体	3
語りかけ	48	セカンドオピニオン	7	他障害	11
コミュニケーション	44	福祉	17		

ねるごとに離乳食、食形態、食域、スプーン・フォーク・箸の使用、「玩具遊び」については、受動的な遊びから能動的な遊びへの働きかけ、玩具の選択といったように、見えない・見えにくさゆえの課題が生じてくるのではないかと考えられる。また、年齢が上がるにつれて減少した項目は、特にみられなかった。

(8) 保護者への主な情報提供内容

保護者への情報提供の内容としては、表7に示した通りである。「見えない、見えにくさ」についての情報提供を前提にして、遊び、触覚・聴覚の活用、発達、手指の活用、生活習慣など、保護者からの質問事項を踏まえ、多岐にわたっての情報提供がなされている。

(9) 盲学校における早期支援の体制について

早期支援専任を配置していると回答した盲学校は、回答63校中、33校の52.4%にとどまったにも関わらず、早期支援については、「可能」もしくは「受けざるを得ない」という回答が100%であった。そして、受け入れの課題や問題点として、人員の配置、施設の整備、教員の研修をあげている学校がかなりの数にのぼった。

以下、具体的な記述を挙げる。

- ・乳幼児支援のための専用の部屋がない。対象児と保護者双方への支援が十分にできるような人員体制（複数で支援）が必要と感じている。
- ・教育相談担当者2名とも非常勤で1年契約のためいつ切られるかわからない。早期教育相談用の部屋がない。
- ・対応する職員の数が足りない。

- ・担当する教師の専門性の向上が必要。
- ・専任ではないので授業時間との調整に苦慮している。

(10) 視覚障害乳幼児の発見・診断・支援までのシステムについて

関係諸機関との連携については、50機関がその必要性について記述していた。自由記述であるにも関わらず、多くの機関が連携の必要性を明記していることは特筆すべきことであろう。以下に、関係諸機関との連携および校内体制等に関しての具体的記述を掲載する。

1) 関係諸機関との連携に関して

- ・発見・診断については、保護者と医療との関係が大きく、まだ学校としては連携はとれていない。診断と支援がつながって学校が関係することができたら、早期支援に取り組むことができると思う。
- ・医療から盲学校へのつながりがスムーズにいくように結びつきを深めていくことが大切であると思う。医療・福祉・教育機関、相互の機関を結び付けるようなコーディネーターづくりが必要である。
- ・〇〇県では視覚障害乳幼児の相談機関は本校だけであるにもかかわらず、保護者から「盲学校で相談を行っていることを病院も保健師さんも知らなかった。もっと早くに知りたかった。」ということをたびたび聞く。医療・保健・福祉等への働きかけが薄いと感じている。
- ・現在、小児医療センターとは連携ができつつある。病院内で医師の診断に同席、子どもの様子・診察内容、医師の話を保護者と共有できている。その後、医師から盲学校の教員を紹介し、相談につながっている。病院内での相談で保護者も気軽に話してくれ、その後、継続相談もできている。地域については、定期的に相談している場はあるが、限定された市なので、全県に広げたいがスタッフ不足である。
- ・平成18年度から保健師さんの会議や研修会で盲学校のことをアピールさせていただくようになり、乳幼児の紹介が増えてきている。

2) 校内体制との関連で

- ・支援を盲学校で行っているが、対応する人員の確保・予算措置について行政に働きかけ、医療や行政と盲学校との十分な連携・支援が図れることが望ましい。
- ・3歳以前の乳幼児のケース数は少ない。教育・福祉機関と医療機関との連携を強化することでケース数は増えてくるのではないか。ただし、盲学校の現行定数では教育相談受け入れ枠は広がられない。

- ・学校側の受け入れ体制の充実をはかり、各機関との情報交換や連携を図ることが必要である。

3) その他

- ・小児専門の眼科医師が増えてほしい。
- ・重複障害の幼児が多いので、聾学校や養護学校など他の特別支援学校との連携が必要である。

3. 考察

(1) 早期支援機関への紹介ルート・連携システムに関して

- ①紹介ルートにかなりのばらつきがみられた。しかしながら、ほとんどの機関が、眼科、保健所からの紹介事例を有している。
- ②盲学校・施設等への初回来校・来所の月齢においても、地域や個人差によりかなりのばらつきがみられることから、診断から紹介までのルート、時期等についてはシステム化されていないと考えられる。
- ③保育園・幼稚園に通園する中で、視覚のケアの必要性から盲学校等を紹介するケースもかなりみられる。
- ④HPを見ての問い合わせやクチコミもかなりの数にのぼっており、情報が浸透していない中で、情報を探している保護者の存在が見て取れる。
- ⑤保健所や行政機関との連携が少しずつ進んできている実態や端緒的ながら医療機関とのスムーズで日常的な連携が図られてきているところもみられた。
- ⑥盲学校等の支援機関においては、医療機関の中では盲学校等の役割や実践についてはほとんど認識されていないと考えている。しかしながら、関係機関との連携の必要性を強く感じ、望んでいる。

(2) 盲学校の校内体制に関して

- ①幼稚部設置校においては、早期支援を実施している、もしくは調査段階においては、実施していないものの早期支援体制をとる予定であると100%の盲学校が回答している。
- ②盲学校における早期支援専任の配置は回答校数の約半数であり、兼任教員のやりくりの中で支援業務を実施している現状がある。
- ③保護者への情報提供は、視覚障害に関する事項をはじめとして、遊び、触覚・聴覚の活用、発達、手指の活用、生活習慣など、保護者からの要望・質問事項を踏まえ、多岐にわたっている。
- ④早期支援をすすめる上での課題や問題点として、人員の配置、施設の整備、教員の研修をあげている学校が

かなりの数にのぼった。

4. 今後の課題

以下に、全国調査結果を踏まえての主な課題を挙げる。

- ①視覚障害の発見・診断から早期支援へのシステムづくり
- ②医療機関など関係諸機関に対して盲学校対象乳幼児や早期支援の実際についての情報提供と連携の取り組み
- ③多岐にわたる相談・支援に応えうる内容の充実と機関連携を図りながらのトータルな相談支援体制整備
- ④盲学校内外の理解を求めながらの人的・物的な条件整備と早期支援担当者の研修の充実

付記

特別支援教育制度のもとで「盲学校」から「特別支援

学校」へと名称が変更になっているが、全国的には通称として盲学校の名称を使用している学校が大半であるため、本調査の報告には、「盲学校」の名称を使用した。

おわりに

本調査は、科学研究費補助金〔基盤研究（B）課題番号 18330199 研究代表者：前川久男 平成 18 年度－20 年度〕による「特別支援教育体制における盲・聾・養護学校のセンター的機能の確立・発展に関する研究」の一環として実施した調査であり、同研究成果報告書における調査報告に加筆したものである。

最後に、全国の盲学校および視覚障害関連施設の皆様には、快くアンケートに回答いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

【視覚に障害のある乳幼児の早期支援に関するアンケート】

以下の質問にお答えください。

貴校・貴施設名 ()
 記入者 () 職名 ()

1 貴校・貴施設の幼稚部等の在籍児数および就学前の早期相談・支援対象の乳幼児数等
 計 () 名

盲学校関係の方は、現在の在籍児数および早期支援対象の乳幼児数等を、施設関係の方は相談児数や支援児数の内訳を、下表にご記入下さい。なお、表内の「重複児童」とは、肢体不自由・聴覚障害・知的障害等を併せ有する児童です。

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳級	4歳級	5歳級
幼稚部在籍	名	名	名	名	名	名
全盲	名	名	名	名	名	名
弱視	名	名	名	名	名	名
この内重複児数	名	名	名	名	名	名
相談児数	名	名	名	名	名	名
全盲	名	名	名	名	名	名
弱視	名	名	名	名	名	名
この内重複児数	名	名	名	名	名	名
支援児数	名	名	名	名	名	名
全盲	名	名	名	名	名	名
弱視	名	名	名	名	名	名
この内重複児数	名	名	名	名	名	名

2 視覚障害乳幼児の平均的な来校・来所時年齢は何ヶ月頃ですか？

(約 ヶ月 又は ヶ月から ヶ月位)

3 重複障害のある視覚障害乳幼児の平均的な来校・来所時年齢は何歳何か月頃ですか？

(約 歳 ヶ月 又は 歳 ヶ月から 歳 ヶ月位)

4 視覚障害として診断確定後、来校・来所するまでの経過期間はどのくらいですか？

(約 ヶ月 又は ヶ月から ヶ月位)

5 貴校・貴施設への視覚障害乳幼児の紹介ルートについて、お教え下さい。(特に多いところ、決まっているところに◎、紹介があるところに○を付けてください)

- () 特定の眼科医
- () 視能訓練士
- () 眼科病院、総合病院眼科

差し支えなければ病院名：

- () 産院、産科医、小児科医院、小児科医
- () 保健所、保健師

() その他の紹介ルート

例えば：

() その他

学校HP・口コミなどを含む：

6. 病院等にて視覚障害と診断を受けた乳幼児について、貴校・貴施設へ紹介されるまでの過程においての問題点等、お気づきのことがあればお書きください。

(1) 出生医療機関での視覚検査および検査後の対応について

(2) 診断機関での対応について

(3) 保健所、行政機関等の対応について

7. 貴校・貴施設が担当する地域では、3ヶ月検診・1歳半・3歳検診などで視覚障害の有無を判定するシステムがありますか？

ある ない

ある場合には、そのシステムの具体的内容を

8. 担当する地域内で、貴校・貴施設以外に視覚障害乳幼児の早期支援を行っている機関がありますか？

ある ない

ある場合には、その機関の名称を

9. 貴校・貴施設における早期発見児の受け入れに関して、該当するものに○をつけて下さい。

- () (1) 担当地域内の発生であれば、現在の体制で受け入れ可能である。
- () (2) 当初は(1)と考えていたが、相談数が増加し、人員不足である。
- () (3) 現職員数では余裕はないが、他に受け入れ先がないので、受けざるを得ない。

- () (4) 定員数と職員数を増やさない限り、受け入れは難しい。
- () (5) 6か月以下の乳児の指導経験がないので、受け入れには研修が必要である。
(必要な研修の内容：)
- () (6) 設備の拡張が必要である。(指導室等の不足)
- () (7) 担当地域内に、視覚障害乳幼児を支援できる療育機関等の増設が必要である。

その他、貴校・貴施設における早期発見児の受け入れに関しての問題点がありましたらお書きください。

10. 早期からの乳幼児教育において、貴校・貴施設での対応だけでなく家庭訪問などの従来とは異なった指導・支援方法等を行っておられる場合は、その内容を以下にご紹介下さい。

11. 貴校・貴施設の教育相談（あるいは乳幼児教育）担当職員数をお答え下さい。
専任教員・職員 () 名
幼稚部等との兼任教員・職員 () 名
常勤職員以外の、非常勤職員、ボランティアなど () 名

12. 早期教育事例に対し、職員以外の職種（眼科医、保健師、視能訓練士等）、視覚障害児の保護者、視覚障害当事者等も支援チームに参加してもらうことへのご意見、貴校・貴施設の実践等をお書きください。

13. 初期段階の保護者に対して行っている情報提供の内容（講座やガイダンス、個別面接等で行っている内容）について、以下のキーワードの中で当てはまるものを○で囲んでください。

視覚障害 障害理解 障害受容 補助具（眼鏡・ルーペ・単眼鏡・拡大読書器）
 盲学校 弱視学級 通級指導教室 視力検査 視野検査 色覚検査 知能検査
 語りかけ コミュニケーション 運動 歩行（ひとり歩き） 手指の活用 認知
 ことば 触覚や聴覚の利用 遊び 乳幼児発達全般 家族 保健師 視能訓練士
 セカンドオピニオン 福祉 身体障害者手帳 補助具申請手続き 進路 就職
 就学 視覚活用 親子関係 生活習慣 躰 親の会 視覚障害者団体
 他障害について

その他（具体的に：)

14. 0歳段階で、保護者からの質問、相談で多い項目は何ですか？下のキーワードの中で当てはまるものを○で囲んでください。

補助具の選択	補助具申請手続き	補助具全般	視力検査	視野検査	色覚検査
知能検査	コミュニケーション	運動	歩行(ひとり歩き)	手指の活用	認知
ことば	触覚や聴覚の利用	遊具遊び	玩具遊び	視覚活用	身体障害者手帳
他の教育(療育)機関	他障害について	就学(進路)	親の会について	親子関係	
兄弟姉妹	家族(兄弟姉妹以外)	友達関係	睡眠や食事(生活習慣)	躰	
その他(具体的に:)					

15. 1歳段階で、保護者からの質問、相談で多い項目は何ですか？下のキーワードの中で当てはまるものを○で囲んでください。

補助具の選択	補助具申請手続き	補助具全般	視力検査	視野検査	色覚検査
知能検査	コミュニケーション	運動	歩行(ひとり歩き)	手指の活用	認知
ことば	触覚や聴覚の利用	遊具遊び	玩具遊び	視覚活用	身体障害者手帳
他の教育(療育)機関	他障害について	就学(進路)	親の会について	親子関係	
兄弟姉妹	家族(兄弟姉妹以外)	友達関係	睡眠や食事(生活習慣)	躰	
その他(具体的に:)					

16. 2歳段階で、保護者からの質問、相談で多い項目は何ですか？下のキーワードの中で当てはまるものを○で囲んでください。

補助具の選択	補助具申請手続き	補助具全般	視力検査	視野検査	色覚検査
知能検査	コミュニケーション	運動	歩行(ひとり歩き)	手指の活用	認知
ことば	触覚や聴覚の利用	遊具遊び	玩具遊び	視覚活用	身体障害者手帳
他の教育(療育)機関	他障害について	就学(進路)	親の会について	親子関係	
兄弟姉妹	家族(兄弟姉妹以外)	友達関係	睡眠や食事(生活習慣)	躰	
その他(具体的に:)					

17. 視覚障害乳幼児の発見・診断・支援までのシステムについてご意見を自由にお書きください。

--

ご協力有り難うございました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。